

《研究集会》

大学図書館のネットワーク 形成をめざして

——情報検索と新しいサービスの在り方を求めて——

昨年11月24日と25日の2日間、日本図書館協会大学図書館部会及び国公立大学図書館協力委員会の主催により、「第9回大学図書館研究集会」が標記のテーマで行われた。会場は東京都町田市にある法政大学多摩キャンパス百周年記念館で、全国の大学から200名の参加者の下に熱心な討議が行われた。

全体会議で東京大学の倉橋部長による“国際化時代における大学図書館”という基調講演の後、分科会討議に入った。

第1分科会：ネットワークの形成

—相互協力を視点として—

コーディネーターから、外国雑誌の分担収集と相互利用（外国雑誌センターの活動）、オンライン国際図書館ネットワーク、東京西地区大学図書

館相互協力連絡会について報告があり、大学図書館の相互協力とネットワークの形成について討議を行った。

第2分科会：情報検索と利用者サービス

中規模図書館での機械化の現状と課題、大規模図書館のトータルシステム、特に多種多様化しているデータベース利用の現状と今後の利用拡大への問題点、及びデータベース提供機関（JICST 日本科学技術情報センター）から、今後の動向について報告された。これらを受けて、データベース利用上の問題に集中して質問・討議がなされた。

第3分科会：学術情報センターと学術情報の構築 をめぐって

国立大学と私立大学の接続館から事例報告及び学術情報センターから同センターのNACSIS-CATを中心とした現状と今後についての報告がなされた。討議を通じて、ネットワークの形成と学術情報システムの構築状況について理解を深めることができた。

『雲』（標題写真）を改版

「静脩」の創刊、昭和39（1964）年以来、標題横を飾っている斎藤素敏の「雲」の版を今回改めました。創刊以来使っていた写真版が長期の印刷で摩耗してきたため、今回、撮影し、装いを新たにしましたものです。

このレリーフは図書館1階と本部事務局正面玄関に飾ってあり、2階ロビーにある西園寺公望による額「静脩館」とともに京都大学と図書館の歴史を長い間見つめ続けてきたものです。

「雲」（はじめは「空」といわれていた）の由来については、元教育学部長・名誉教授の鰐坂二夫先生が「静脩」誌上で述べておられます。少し長くなりますが引用します。

「『雲』が作られたのは、大正13年、軍閥はなやかな時であった。この男女の裸体の浮き彫りが問題になったのは当然である。それのもつ芸術的な価値や、品格というようなものが、それにふさわしく評価されないばかりか、かたく

々な旧来のものの考え方、見方は、やがて美の世界への圧力となって、この『雲』の上にも不当な嵐を呼び起こす気配さえもあらわれ、これを芸術品として、その嵐から守ろうという識見の人のないままに『雲』の行方はあやぶまれた。

その時である。京大総長荒木寅三郎先生は敢然としてその『雲』を京大に引き受け、それを正面玄関に高くかけられたのであった。以来『雲』は京都大学のあゆみとともにある。学問の真理と研究の自由を背骨とする大学は、また、美の擁護者でもあったのである。」（「静脩」1（2）、1964. 11）

西島総長も昭和62年度学部入学式で、この作品と京都大学とのかかわりについて詳しく述べておられます。（「京大広報」No. 330, 1987. 4. 15）